

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

赤十字NEWS

オンライン版はコチラ



9

September 2026
#1036

国際赤十字・赤新月社連盟
事務総長

ジャガン・
チャパゲインさん

×

俳優・プロデューサー

山口 智子さん

スペシャル対談

あなたにも、 誰かを笑顔にする 力がある

P.4

#1

なぜ、あなたが「聞く」と
世界は変わるのか

#2

「Listen」「Learn」「Lead」
3つの“L”を胸に

C
O
N
T
E
N
T
S

特集

令和8年熊本地震

被災地で動く赤十字 P.2

9月は「いのちを救う 寄りそう PROJECT」を実施

支援は、その先も続いていく P.3

TOPICS

子ども食堂「マリリンの家」で育つ学生ボランティア
「やってみないと分からない」で、乗り越えて

40数年の時を経て、生まれた場所へ、家族と共に

ベトナム難民を支えた「赤十字希望の家」

..... P.9

AREA NEWS

[京都]

応募者100人超！
献血ルームで祇園祭観覧イベント

[香川]

赤十字講習100周年
記念キャラバンが香川に
親子で救急法・防災学習／他 P.10

WORLD NEWS

バングラデシュ南部避難民を支える赤十字の支援
危険な航路と知っても、希望を求めて海へ

..... P.12

Present!

フィットウェーブ MN-06 低周波治療器

詳しくはP.11をCheck! ▶



7名様



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society



日本赤十字社は
2027年に150周年。

R2100

古紙パルプ配合率100%
再生紙を使用



環境にやさしい植物油インキを
使用しています

SPECIAL FEATURE 令和8年熊本地震 被災地で動く赤十字

2026年7月28日、熊本県で最大震度7を観測する地震が発生。各地で建物やライフラインに大きな被害が広がる中、日本赤十字社は直ちに救護活動を開始しました。

令和8年熊本地震 概要	
発生	令和8年7月28日 16時27分
震源地	熊本県熊本地方
最大震度	7を観測
被害状況	
人的被害(熊本県)	住家被害(熊本県)
死者 39人	全壊 1449棟
重傷 26人	半壊 1340棟
軽傷 329人	一部破損 11587棟

日赤CoT(Coordinate Team:災害医療コーディネートチーム)
CoTとは:被災地の医療ニーズを把握し、行政やDMATなどの関係機関と連携しながら、救護班が必要な場所で円滑に活動するための調整業務を担うチーム。

※8月17日時点の情報



日赤熊本県支部災害対策本部

日赤CoT
5支部延べ12チームを派遣
宮城県支部 長崎県支部 沖縄県支部
群馬県支部 熊本県支部

こころのケア調整班・こころのケア班
11支部延べ12班を派遣
本社 京都府支部 広島県支部
東京都支部 大阪府支部 香川県支部
三重県支部 島根県支部 福岡県支部
滋賀県支部 岡山県支部

救護班 **25支部延べ36班を派遣**
茨城県支部 富山県支部 奈良県支部
栃木県支部 石川県支部 和歌山県支部
群馬県支部 山梨県支部 島根県支部
埼玉県支部 岐阜県支部 福岡県支部
千葉県支部 静岡県支部 熊本県支部
本社 愛知県支部 大分県支部
東京都支部 京都府支部 鹿児島県支部
神奈川県支部 大阪府支部
新潟県支部 兵庫県支部

日赤CoT
11支部延べ12チームを派遣
埼玉県支部 鳥取県支部
神奈川県支部 徳島県支部
新潟県支部 高知県支部
石川県支部 福岡県支部
岐阜県支部 熊本県支部
三重県支部

宇城市

救護班
23支部延べ34班を派遣
岩手県支部 山口県支部
宮城県支部 徳島県支部
秋田県支部 香川県支部
山形県支部 愛媛県支部
福井県支部 高知県支部
長野県支部 佐賀県支部
愛知県支部 長崎県支部
三重県支部 熊本県支部
鳥取県支部 宮崎県支部
島根県支部 鹿児島県支部
岡山県支部 沖縄県支部
広島県支部

宇城市

日赤熊本県支部

現場の声

日本赤十字社(本社) 救護・福祉部 救護課 課長
土居 正明 さん

地震発生の速報を耳にした瞬間、10年前の熊本地震を思い出し、同時に、長い復旧・復興の歩みを続けてこられた被災地の皆さまの姿が目に見え、胸が痛みました。被害の全容が見えない中、即時に立ち上がった災害対応体制、判断に迷いがあっても、「現地の情報が入らないということは、それほど深刻な状況だからかもしれない。空振りを恐れてはいけません!」と自らに言い聞かせました。こうして全国の赤十字による支援が熊本を目指して大きく動き出しました。これからも「すべては被災者のために」を胸に支援を続けてまいります。

宇城市

日赤CoT
6支部延べ6チームを派遣
福島県支部 和歌山県支部
京都府支部 広島県支部
兵庫県支部 佐賀県支部

全国から被災地へ。必要な支援を、途切れさせない

地震発生の翌日(7月29日)、救護班4班、日赤災害医療コーディネートチーム(CoT)4チームが被災地で活動を開始しました。被災者の健康を守るため、避難所を巡回して、衛生・感染予防のアドバイスや改善提案を行い、救護所での診療や被災した医療機関の支援などにあたりました。

その後も全国各地から救護班などが次々と熊本へ。これまでに救護班は延べ70班、CoTは延べ30チームが活動(8月17日時点)。救護班は救護所での診療や巡回診療の他、災害関連死防止のための取り組みを行い、CoTは、被災地の保健・医療ニーズを把握し、関係機関との調整や、医療救護に関する専門的な助言を行いました。

多くの人が避難生活を送り、断水など暮らしへの影響が続く中、日赤は、赤十字ボランティアと共に、安眠セットやタオルケットなどの救援物資を届けたほか、断水が続く地域では、海外での災害対応のノウハウを生かした給水衛生支援も実施。避難所に洗濯機や手洗い場を設置するなど、避難生活を支える活動も。

発災直後の医療救護から、避難生活の支援や「こころのケア」へ。時間の経過とともに、被災地で必要とされる支援は変わっていきます。変化する被災地のニーズに応じ、全国から力をつなぎながら、日赤はこれからも支援を続けていきます。

現地の声

氷川町在住の避難者



氷川町在住
造道 ツタエ さん(左)
ヤエ さん(右)

移動もしやすく、母の足のむくみ減って、夜も安心して休めています。今後に不安はありますが、皆さんに助けていただけて本当に感謝しています。

地震は階段を上ろうとしていた体が横に吹き飛ばすくらいの激しい揺れで、地震がおさまった後、家具が倒れた家の中に母と二人でいましたが、「津波が来るから逃げて!」という呼びかけで、命がらから、避難しました。

母は94歳で足が不自由なので、避難所の床に敷いた布団から自力で動くことができず、また私は腰が弱いので母を床から車いすに移動させてあげるのも大変で、避難所の生活にかなりの負担を感じていました。でも、段ボールベッドを設置していただけたからは、いろんなことが楽になりました。ベッドから車いすへの移動も、母の足のむくみも減って、夜も安心して休めています。今後に不安はありますが、皆さんに助けていただけて本当に感謝しています。

大分日赤救護班



大分赤十字病院
佐藤 悦美 看護師

いかに健康、尊厳を守るため、赤十字の活動を支援するお金です。

地震発生から5日目。避難所を巡回中、ある避難所を離れる際に1人の女性から声をかけられ、話を聞きました。「皆、同じ状況で同じくらい思っているのは分かっている。でもどうしたらよいのでしょうか?私のわがままかもしれない!」と目に涙を浮かべながら思いを打ち明けてくれました。

被災者は、皆同じ境遇だからと我慢されていた。一人一人の思いにできるだけ寄り添い、話すことで少しでも気持ちが軽くなるようにと思いながら活動しました。

「令和8年熊本地震災害義援金」受け付け中

義援金▶▶▶
被災地の方々へ、お悔やみや応援の気持ちを込めて贈るお金です。

※全額が被災地に送られ日赤の活動には使われます

赤十字活動へのご寄付はこちら

活動資金▶▶▶
いのちと健康、尊厳を守るため、赤十字の活動を支援するお金です。



海と空から命を支える日赤の活動

①民間船を有事の際に国が利用する契約を交わしたPFI船「はくおうII」。船舶活用医療は、能登半島地震で浮き彫りとなった道路寸断や災害関連死への課題を背景に、実効性ある運用体制の整備が加速した。②乗船前の打ち合わせを行う日赤救護班、内閣府、自衛隊



日本赤十字社医療センター(東京)
諸江 雄太 医師

戦後初の船舶活用医療、その舞台裏で赤十字が果たした役割

令和8年熊本地震で、国の「船舶活用医療」が初めて実働しました。防衛省のPFI船「はくおうII」を活用し、入浴・休憩支援とともに船内で医療提供を行う新たな取り組みです。制度そのものは阪神・淡路大震災以降の議論を経て法制化されましたが、実際の災害現場で運用されたのは今回が初めてでした。

日赤は、船舶活用医療の制度設計や訓練の段階から内閣府と連携し、2025年には内閣府との協定を締結。災害時に船内で医療を提供する救護班を整備し、今回の船舶活用医療の実践を支えました。

現地では、日赤医療センター(東京)国内医療救護部長の諸江雄太医師が内閣府調査チームの一員として活動。さまざまな関係機関をつなぐ調整役を担いました。諸江医師は「被災した熊本県や八代



市、地元医師会をはじめ、内閣府、防衛省自衛隊、国土交通省や、船舶運営会社、この場に集結した多くの医療チームが協働して、船舶活用医療を始めることができた」と振り返ります。

船舶活用医療は始まったばかりです。しかし、海上を舞台に、多様な組織が力を合わせて被災者を支える仕組みが実際に動き出した意義は決して小さくありません。赤十字はその仕組みの中心で、人と組織を結び、被災者に寄り添う新たな災害医療の第一歩を踏み出しました。

③④日赤の救護班は、一般の方が乗船する際のメディカルチェックを担当。⑤窓から海が見える船内の大浴場。⑥断水により満足に入浴できなかった方が「気持ちよかった!」「日本ってやさしい国だと思った」と感謝の声を寄せた

海から命を支える

空から命を支える



日赤の特殊奉仕団「赤十字飛行隊」、孤立した福祉施設へ緊急支援

熊本地震で孤立状態となった特別養護老人ホーム「キャッスル麦島」から、赤十字飛行隊に支援要請が寄せられました。施設では入居者約40人(80~100歳)と職員35人を支えるための飲み水や食料が残りわずかとなり、早急な支援が求められていました。飛行隊は当初ヘリコプターによる輸送を検討しましたが、近隣の着陸が困難だったため、まず熊本にある飛行隊支隊のグラウンドチームが陸路での運搬を実施。水403リットルをはじめ、食料、介護食、紙おむつ、衛生用品などを積み込み、被災施設へ届けました。

続く2日目には、赤十字飛行隊とAOPA-JAPAN(日本オーナーパイロット

協会)が連携し、関東で調達した救援物資を小型ジェット機で成田空港から熊本空港へ空輸。おむつ約300袋のほか、パックごはんやレトルト食品、除菌シートなどを現地へ届けました。

支援を受けた施設長は、「飛行隊の方が物資を届けてくださったとき、被災直後の厳しい混乱の中、“光が届いた”と感じました。利用者さまだけでなく、奮闘する職員にとっても『自分たちは孤立していない』という大きな勇氣になりました。そして第二弾が届いたときの喜び。高齢者福祉施設において、紙おむつなどの衛生用品は一日たりとも欠かすことのできない最重要の命綱です。また、ご提供いただいた菓子パ



赤十字飛行隊が今回の支援で運んだ物資

ンは、余震への不安が続く利用者さまやスタッフのおなかを満たすだけでなく、近隣の施設の皆さまに配布し、その甘みと温かいお心遣いが張り詰めた心を和ませてくれました」と感謝の言葉を語りました。

いのちを救う 寄りそう PROJECT
+ 日本赤十字社
www.redcross.or.jp

9月は「いのちを救う 寄りそう PROJECT」を実施
支援は、その先も続いていく



災害時の赤十字の活動は、発災直後の医療救護だけではなく、時間の経過とともに被災した方々の状況が変わる中、必要とされる支援も形を変えながら続いています。

令和6年能登半島地震でも、さまざまな活動が続けられてきました。発災から60日、「こころのケア」調整班の一員として被災地に入った深松伸明さん(岡山赤十字病院 医師)は、「こころのケアと一口に言っても、抱えている悩みや苦しみは一人一人違います。その声に丁寧に耳を傾け、適切な支援につなぐ橋渡し役となることを心がけました」と振り返ります。

発災から約90日、救護所や避難所を巡回した大浦美穂さん(日本赤十字社医療センター 看護師長)は、医療へのアクセスが難しい状況が続く中、声をかけ、体調を確認し、必要に応じて医療や保健につなげました。「災害のフェーズは確実に変化していましたが、被災者を孤立させない見守りと継続的な支援の重要性を強く実感しました」と語ります。

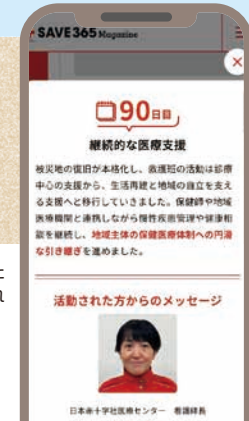
そして発災から約180日。仮設住宅を訪問した柏崎三代治さん(宝達志水町赤十字奉仕団 委員長)は、茶話会や軽体操、傾聴などを通して住民と交流。「体力に自信がなくてもできる『心に寄り添う支援』や『細くても長く続ける支援』も必要であると感じ

特設サイトでは、活動された方々のメッセージが掲載されています

しています。今後も、できる範囲で継続していきたいと思います」と話します。

発災から時間がたっても、人を支える活動は続いています。日赤では9月、「いのちを救う 寄りそう PROJECT」を実施。発災直後からその後も、被災した方々に寄りそうさまざまな救護活動を紹介します。

詳しくは
[SAVE365 Magazine]
特設サイトから



Special
Dialogue

国際赤十字・赤新月社連盟 事務総長

俳優・プロデューサー

ジャガン・チャパゲインさん × 山口 智子さん

ジャガン・チャパゲインさん

Profile

ネパール赤十字社のユースボランティアとしてキャリアをスタートし、アジア・大洋州地域局長などを経て、2020年2月から現職に。大規模な人道危機への対応や各国赤十字社、赤新月社との連携に豊富な経験を持つ。

山口 智子さん

Profile

1988年にNHK連続テレビ小説のヒロインで俳優デビュー以降、数々のヒット作に出演。近年は、世界の音楽文化の映像ライブラリー「LISTEN.」を発信し、チャリティーイベント「GO!GO!ラリー」など、多岐にわたって活躍。

スペシャル対談

あなたにも、誰かを笑顔にする力がある

#1

なぜ、あなたが「聞く」と世界は変わるのか

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC) 事務総長であるジャガン・チャパゲイン氏と、俳優であり、世界各国を旅してその文化を発信する活動も行う山口智子さんの対談が実現。「聞く」ことから何が始まり、私たちの行動はどう変わるのか。お二人の言葉から考えます。

「こんなにも人を助けたいなんて」 15歳、人生が変わるほどの衝撃

(チャパゲインさん)

山口さん(以下、山口)：チャパゲインさんは、初めての渡航が日本だったそうですね。

チャパゲインさん(以下、チャパゲイン)：はい。赤十字ユースボランティアとして、日本の青少年赤十字との交流イベントのために来日しました。1983年、15歳のときでした。まるで映画の世界に飛び込んだような、胸が躍る経験でした。その

中でも驚いたのは、日本の学生たちのボランティア活動です。それまで赤十字ボランティアは開発途上国で活動しているものと思っていました。ところが、日本のような発展した国でも非常に活発に行われていた。**日本の学生が、お小遣いを少しずつ貯めてネパールの学校の水道事業に寄付している姿を見て、「こんなにも、誰かのために何かしようとしているのか」と胸を打たれました。**この気づきが、私の赤十字活動の原点です。私は、よくこう話します。「私の赤十字人としてのキャリアを導いてくれたのは、日本です」と。

山口：チャパゲインさんはネパールのご出身ですよ？ 私は世界の音楽文化を映像に収める「LISTEN.」というプロジェクトで、ネパールを訪れたことがあります。隣国のインドのエネルギー豊かな舞踏や映画はよく知られていますが、ネパールは素朴で控えめなイメージでした。でも、実際に訪れたら、誰もが歌と踊りを愛し、ネパール各地を舞台にしたミュージカル映画が一日中テレビで流れていました。その熱量に驚き、圧倒されました。ネパールの古都・バクタプル*1で、古い伝統歌を今に甦らせる若者たちを撮影したのですが、エネルギーにあふれた彼らの音楽と笑顔は忘れられません。

チャパゲイン：そう、ネパールの人々は裕福ではありませんが、音楽や踊りを通して生きる力を生み出しています。彼らは人生を祝福しながら生きているのです。

*1 世界遺産の1つであるバクタプルは、「祭り」が生きた遺産と呼ばれるほど、古代の儀式を数世紀前と変わらぬ熱量で受け継いでいる歴史ある町として知られる

耳を傾け、心を開く 世界を「知る」ことは、平和への道 (山口さん)

チャパゲイン：歌や音楽がある場所には必ず人々の笑顔がありますよね。赤十字の活動において、その**笑顔をもたらしてくれる存在はボランティア**です。紛争や災害などで困難な状況にあっても、ボランティアの「人を助けたい」という気持ちが、笑顔の輪を生み出します。一方で、人道支援活動の中で命を落とすボランティアがいるのも事実です。今朝、この対談に来る前に、悲しい一報が届きました。コンゴ民主共和国で流行するエボラ出血熱の対応をしていた**赤十字ボランティア2人が、武装勢力に殺害された、と、彼らは人々の命を救おうとしていて、命を落とした**のです。仲間の訃報に接することは、私にとって最もつらい瞬間です。私たちにできることは、その志を受け継ぎ、行動し続けることです。私は、世界を巡る中で、ボランティアの勇気と献身が、人々に笑顔の連鎖を生むシーンにたくさん出会ってきました。例えば、2025年のミャンマー地震のとき。ミャンマー赤十字社が運営する子ども向けの施設を訪れた際、みんなが踊って楽しんでいる場の片隅に、輪に入らずにいる女の子がいました。それを見た若いボランティアはそっと彼女に近づき、何も言わずに隣で踊り始めたのです。次第に彼女は表情が和らぎ、最後には輪に入ってみんなと一緒に笑い、踊るようになりました。**ボランティアは、被災者である少女が抱えていた恐れや孤独を癒やし、少しずつ安心感や喜びへと導いてくれた**のです。小さなエピソードですが、私にとってそれは、人道支援の本質を象徴する出来事でした。



ミャンマー赤十字社のボランティアと踊る少女

虐げられた民族が生んだ美しい音楽 心を結び、互いに懂れ合える (山口さん)

山口：歌や踊りは地球上で最も基本的なコミュニケーションですね。私は、「明日も元気に頑張ろう!」と思える、生きる力が湧く音楽を追いかけています。虐げられた歴史を持つ民族の音楽には、生き抜くパワーが満ちています。以前、ハンガリーでロマ*2が暮らす村を訪れ、子どもたちの洗礼式の祝宴に参加しました。互いに協力し合い、食べ物を持ち寄って、三日三晩歌い踊り続けるんです。**社会的に厳しい立場に置かれ、長く差別も受けてきたであろう人々が、最高の音楽で心を結び合い、逆境を生き抜いていく姿に圧倒**されました。彼らの姿に、真の豊かさを感じました。日本は物質的には恵まれていても、彼らのように仲間と笑い合う、真の豊かさを忘れてしまっているかもしれません。**チャパゲイン：**一方で、日本は逆境に置かれている人々や困難な状況に対して、素晴らしい貢献をしてきましたよ。だからこそ、日本で大災害が起こった際には、世界が動くのです。2011年の東日本大震災のときも、**世界中の国々が日本を助けたいと思いました。**私も震災後に日本を訪れ、

被災地を訪問しました。そこで見たのは、世界からの連帯だけではなく、日本国内の連帯です。至るところに赤十字ボランティアがいました。特に日赤の医師や看護師たちは、危険かもしれない地域でも活動していました。

山口：素晴らしいですね。チャリティーイベントで東日本大震災の被災地を訪れた際の、若い漁師さんの言葉を思い出しました。「僕たちは震災ですべてを失ったけれど、あのとき世界中の人々が助けに来てくれて、「もう何も怖いものはない」と思えた」と語っていました。彼らはその後の復興だけでなく、漁業の後継者問題などの課題に立ち向かい、副業として漁師を全国から募ったり、新しいアイデアで世界が注目する漁業を牽引しています。世界からの応援が、彼らの新たなチャレンジにつながりました。復興支援やボランティアといった言葉に、ハードルの高さを感じてしまっていますが、**まずは「知る」ことが大切。耳を傾けて「知る」ことから愛が始まると思います。知ることで、相手への尊敬が生まれ、世界の人々が自分の家族や仲間のように感じられる。[彼らが困っていたら、助けに行こう!]**と思えます。

*2 ロマとは、かつてはジプシーと呼ばれた、定住せず移動を続けた民族。歴史的に迫害や差別を受けた一方、スペインのフラメンコをはじめ、世界中の音楽や芸能文化に大きな影響を与えてきた





赤十字にとって、
ボランティアの存在こそ、笑顔の源です。
————— チャパゲインさん

世界中の人々の歌、踊り、笑顔から、
真の豊かさを学びました。
————— 山口さん

あなたにも、誰かを笑顔にする力がある #2

「Listen」「Learn」「Lead」 3つの“L”を胸に

話を聞かないリーダーに 何の改革ができるというのだろう （チャパゲインさん）

山口： 私が「LISTEN.」プロジェクトで目指しているものは、地球の魅力が詰まったタイムカプセル。100年後、1000年後の未来にも誇れる、生きる力となる素晴らしい地球の音楽文化を映像で残していきたいと思っています。これからまさに“宇宙時代”に突入ですよ。地球外生命体に対しても自慢できる、地球の素晴らしいことにもっともって出会っていきたい。**日本は小さな島国ではありますが、地球も大宇宙に漂う小さな島みたいなものですよ。資源が限られた「島」で、互いにより良く生きていくための知恵がこれから大切だと思っています。「地球」という意識を持ち、「地球人」として一丸となれる未来を目指したいです。**

チャパゲイン： 素晴らしい考え方です。あなたの「LISTEN.」はとても興味深い。実は、私が大切にしているキーワードに、3つの“L”があります。その1つ目が、まさに「Listen」なんです。これはリーダーシップの考え方です。最初に「Listen（聞く）」、次に「Learn（学ぶ）」、最後に「Lead（導く）」です。変革を起こすにはリーダーシップが必要ですが、人の話を十分に聞かないリーダーが多い（笑）。まず耳を傾け（Listen）、そこから学び（Learn）、人々と目的を共有しながら行動

する（Lead）。これを繰り返すことが大切だ、常々そう考えていたので、あなたが「LISTEN.」の意義を語ったとき、深く共感したのです。
山口： 3つの“L”！素晴らしい！私も実践します！

人道は専門家のものではない 誰しもが人を笑顔にできる （チャパゲインさん）

チャパゲイン： 私も山口さんにぜひアドバイスをいただきたいのですが、もっと多くの人に赤十字ボランティアに参加してもらうには、どうしたらいいと思いますか？

山口： 個人個人が、特別なことではなく、自分の得意分野で、人々の喜びにつながることを見つけていけたらいいですよ。被災地を訪れたとき、現地の人々が「物資やお金の寄付に感謝すると同時に、時間経過とともに、忘れられてしまうことが怖い」とおっしゃっていました。だから、継続して心を寄せることの大切さを考え始め、自分の好きな分野ならずっと続けていけると思い立ち、夫の趣味であるクラシックカーのラリーイベントを企画しました。毎年、全国から車好きの仲間を募って被災地を走り、みんなで笑顔になれる時間を作ろうと。きっと誰しも、趣味や得意分野がありますよね？ それをみんなで持ち寄れば、支援の形ももっとナチュラルで、継続的なものになるのではないのでしょうか。

チャパゲイン： その通りです、誰しも支援者になることができます。そして、支援者になることは喜びにもつながります。私は元々エンジニアでした。ネパールでは貢献意欲のある学生は医師がエンジニアを目指します。私も、自分の技術力や知識を、社会の課題を解決するために使いたいと思い、その道に進みました。しかし、求めていた満足感が得られなかった。そこで気がついたのです。**自分のエンジニアとしての技能を、機械やシステムを改良するためでなく、人々が抱える問題を解決するために使えばいいのでは、と。**いま私は、人々を助けるために力を尽くせることができ、幸せです。また、赤十字活動に身を投じて分かったのは、人道支援は、決して専門家によるものではないということです。誰しも、世界中の人々に影響を与えられる存在になることができます。

山口： 本当にそうですね。私も旅をする中で、素晴らしい技術を持った職人さんにたくさんお会いしました。彼らに共通する精神は、人々の笑顔や幸せを心に思い、技を駆使して美しいものを生み出すことです。人生の旅の中で出会う、素晴らしい人々が生み出す奇跡のような感動を、もっともっと世界に伝え新しい風を起こしていくことが、旅人としての役割かもしれません。

知らないまま失われていく 地球の美しい宝を伝えたい （山口さん）

チャパゲイン： なるほど、自分が見聞きした情報やリアルなストーリーを伝えていくことが重要ですね。私も、もっとボランティアの姿を伝えていかねば。紛争地を訪れると、そこにも赤十字のボランティアがいます。レバノン赤十字社のボランティアは、負傷者の救急搬送をしていますが、毎朝の出動前に、お互いを抱きしめます。なぜハグをするのか、それは、**生きて帰れる保証がないからです。「これが最後かもしれない」。そんな決意で挨拶を交わし、ハグをするボランティアの姿を見ると、毎回こみ上げてくるものがあります。「ボ**



ランティアの存在があるからこそ、世界は美しい」と、心からそう思います。彼らの姿こそ、私が伝えていくべきストーリーです。

山口： 世の中の理不尽な戦いで、地球の美しい文化や自然が失われていくことに心が痛みます。今ニュースで日々目にするのはイランの紛争。以前、イランの素晴らしい歌声を紡ぐ姉妹に出会い、「LISTEN.」にぜひ参加してくださいとお願いしたのですが、自国では女性のアーティスト活動が難しく、命の危険にもつながると言うのです。結局、彼女たちの故郷ではなくてノルウェーで撮影を行いました。自国での自由な表現が叶わなくても、「この歌は、父母や家族から受け継いだもの。美しい歌を育む故郷を心から愛している」と語る彼女たちの姿に心から感動しました。

チャパゲイン： かけがえのない経験をさせていますね。人と人、文化と文化をつないでいく活動です。同時に、人々が希望を持って生きられる世界につながっていく活動でもあると感じています。山口さんの活動を、赤十字のスタッフやボランティアたちにも広く紹介したいです。



「笑顔」は 危機を乗り越えた後の希望 （チャパゲインさん）

山口： 私も、3つの“L”という大切なキーワードをいただきました。「知る」ことが「愛」を育み、世界中に笑顔があふれるための第一歩。互いの「知る」を深めることができた今日の素晴らしい出会いに、心から感謝です。

チャパゲイン： 笑顔は一見すると、力を持たないささやかなものに見えるかもしれませんが、**笑顔の裏には力強い意味があります。そこには、危機を乗り越えた後の安心感、失った後に生まれる希望、そして、不確実な状況を経た後に得られる自信**が込められているのです。人道への投資を続け、地域社会を強化し、連帯のもとに共に行動していくことができれば、より多くの人が「笑顔」を取り戻し、夢を描き、自信を持って未来に進んでいけるはずです。山口さんの活動も、文化が継承される基盤を支えてくれることでしょう。いつか一緒に旅ができればいいですね！

山口： ぜひ！笑顔をクリエイティブできる旅の実現を願っています！



スペシャル対談を 終えて

この日のために、互いに特別なギフトを用意していたお二人。チャパゲインさんから山口さんへは、IFRCオリジナルの赤いスカーフが、山口さんからチャパゲインさんへは、「LISTEN.」の活動をまとめた書籍が贈られました。

LISTEN.
(リッスン)
プロジェクト
山口 智子さん

Activities

#3
お二人のこれまでの
活動をご紹介します。

地球を“体感”する『LISTEN.』をライフワークに



地球の美しい音楽文化の映像ライブラリー『LISTEN.』プロジェクトは、10年かけて世界26カ国を巡り、各地の民族音楽など、大地に根づいた「生」のエネルギーに満ちた音を収集。書籍化されている他、昨年に引き続き2026年秋から、神奈川県横浜市のアートのスポット『THE MOVEUM YOKOHAMA』で体感型映像を上映予定。

未来に伝えたい「音」に耳を傾ける



©Listen Project ©Twin Planet Communications, Inc.

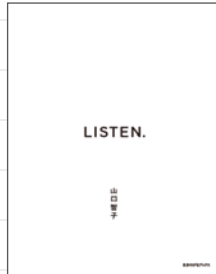


©Listen Project ©Twin Planet Communications, Inc.



©Listen Project

近年は自身のYouTubeチャンネル『山口智子の風穴!?!』を立ち上げ、“大人の学び”をテーマに、国内外さまざまな地を訪れ映像記録を発信。夫で俳優の唐沢寿明氏が発起人を務めるチャリティークラシックカーイベント『GO!GO!ラリー』にも参加し、東北や熊本などの被災地を支援する取り組みも行う。



『LISTEN.』 (生きのびるブックス)

生きる力を生む「地球の音楽」を映像ライブラリーに収めるプロジェクト「LISTEN.」の旅をまとめた一冊。26カ国で撮り溜めた写真に加え、収録した演奏シーンは二次元コードを読み取ることで“体感”できる。

「THE LISTEN PROJECT」
詳しくはこちら ▶



書籍の情報は
こちら ▶



Mr. Chapagain's Activities

ジャガン・
チャパゲインさん

豊かな世界と、なお届かない支援——この矛盾を打開するために



「今日の世界には、必要なものはすべてあります。お金があり、技術があり、全てがある。それにもかかわらず、今何億もの人々が十分な食べ物を得られず、安全な水を飲むことができず、基本的なトイレすらなく、基礎的な医療も受けられずにいます。世界の一方にあふれている豊かさを、もう一方の人々につないでいく。IFRCの活動は二つの世界をつなぐ挑戦です」(チャパゲインさん)



1

1. 2018年9月に発生したスラウェシ島地震・津波を受け、被災地を訪問 2. 大型サイクロンに相次いで襲われた、モザンビークを訪問(2019年4月) 3. エジプトで開催されたCOP27(国連気候変動枠組条約第27回締約国会議)に、IFRCの代表として参加。気候変動を「人道危機」として位置づけ、気候災害の被災住民の声を国際交渉の場に届け、各国首脳に対策強化を呼びかけた(2022年11月) 4・5. 地域の子どもたちに食事を提供する南アフリカ赤十字社のボランティアを支援。子どもたちへの声がけも(2025年9月)



2



3



4



5

1

TOPICS

子ども食堂「マリリンの家」で育つ学生ボランティア 「やってみないと分からない」で、乗り越えて



子ども食堂を運営する森さん(左)と学生ボランティアの横山さん

大阪府堺市の子ども食堂「マリリンの家」。月数回の実施日の中で、毎月第二日曜日は、大阪府支部の青年赤十字奉仕団と学生赤十字奉仕団(近畿大学、大阪産業大学、関西福祉科学大学の学生ら)、そして青少年赤十字(JRC)のメンバーが協力しています。この子ども食堂、ビル1階の3店舗ぶんを使い、**1回の提供目標は、なんと100食!** 学生ボランティアの一人、横山孝太朗さんは、次のように活動を振り返ります。

「学生は調理担当と、子どもたちと遊ぶ担当に分かれて活動しています。僕は主に調理担当です。生まれて初めて10kgの鶏肉で唐揚げを作った後は、手が震えて力が入らなくなりました(笑)。調理が終わると毎

回、疲れ切っていますが、僕も一緒に遊んだり宿題を見てあげたりできれば、もっといいなと思います」

活動を通じて、**ひとり親家庭やさまざまな事情を抱える子どもたちが身近にいることを実感**したとか。学生たちは、子ども一人一人に目を配りながらも、自分から深く踏み込まないようにしているそうです。

この「マリリンの家」を主宰する森重子さんはJRC出身。10代の頃に赤十字活動の中で人を助ける喜びに目覚めた経験から、私費を投じて「マリリンの家」を立ち上げました。そして今は、後進の育成も兼ねて、学生たちに自発的な活動を促しています。「重い課題を抱えた子やご家族がたくさん来るので、プレッシャーを感じることも度々あります。そんなときは**“やってみないと分からない”と頭を切り替え、課題を喜びに変える視点を見つけて乗り越えます。** 学生ボランティアを受け入れるのは、赤十字の子たちが、大人になってどこに行ったとしても、人を助けることを周りに伝染させて、各地で花を咲かせることを願っているから。でも学生たちが、子どもたちと**顔を真っ赤にさせて走りまわる姿を見て、こんなことは若い彼らにしかできない!**と、感心しています」。森さんの言葉のように、学生ボランティアは、ここでの経験を通じて誰かを支えることにやりがいを見出しています。



流しそうめんを楽しむ子どもたち。「マリリンの家」では食事だけでなく、無料書道教室やひとり親の相談会などさまざまな場を提供している



食事が終わったら一緒に遊ぶ時間も。学生ボランティアとドッジボールをする子どもたち



奉仕団の学生たちも試行錯誤を重ねながら、自分たちにできることを話し合います

2

TOPICS

40数年の時を経て、生まれた場所へ、家族と共に ベトナム難民を支えた「赤十字希望の家」

2026年7月、ノルウェーで暮らすトラン・カク・ダイさんが、妻と2人の子どもと共に日赤愛知県支部を訪れました。目的は、自身のルーツをたどること。ダイさんのご両親は1980年代初頭にベトナム難民として来日後、愛知県瀬戸市にあった「赤十字希望の家」で生活。ダイさんはその滞在中に日本で生まれ、1歳頃まで日本で過ごしました。

1975年のベトナム戦争終結後、多くの人々が国外へ脱出し、小型船で海を渡った難民・避難民は「ボートピープル」と呼ばれました。日赤は、こうしたベトナム難民を一時的に保護し、生活を支



当時の写真アルバムを見ながら、自身のルーツをたどるダイさんと息子さん

援。「赤十字希望の家」もその施設の一つとして1980年に開設されました。**希望の家では342人のベトナム難民を受け入れ、施設滞在中には12人の子どもが誕生**しました。

今回、愛知県支部では当時の写真や資料、映像を用意し、希望の家で勤務していた元職員の鈴木光広さんとの交流も実現。アルバムには、生まれたばかりのダイさんや家族、親戚の姿も。**「ご両親のことも、ダイさんが生まれたときのことも、よく覚えてますよ」。**そう語る鈴木さんの言葉に感激しながら、ダイさんはお子さんと共に、一枚一枚の写真に見入っていました。

その後、ダイさんが誕生した産院の跡地や、「赤十字希望の家」の跡地である現在の愛知県赤十

字血液センター周辺にも足を運びました。「幼い頃に日本を離れたため、その頃の記憶はほとんどありません。それでも**自分のルーツの場所を実際に見ることでできて本当に良かったです**」とダイさん。困難な時期に家族を支えた日赤をはじめ、多くの人々や団体への感謝も語りました。

40数年の時を経て、生まれた場所へ。「希望の家」は役割を終えましたが、この日本で、**ベトナム難民の命と「生きていく力」を支えた人道の精神**は、形を変えながら、地域や国内外で苦しむ人々を支える赤十字の活動に受け継がれています。



「希望の家」の外観(当時)。施設がその役割を終え閉鎖が決まったとき、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)からは日赤への深い謝意と共に「難民を助けるという事は(中略)人間が作り出した残酷さと暴力の犠牲者を助けようとする 真摯な人々の一人一人の人間の厳粛さ」から自然と生まれる行いであると、赤十字の理念に通じるメッセージが寄せられた



「赤十字希望の家」の跡地を訪れたダイさん一家と、当時同施設で勤務していた鈴木光広さん(左)

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。



赤十字講習100周年 記念キャラバンが香川に 親子で救急法・防災学習



日赤香川県支部では、7月18日に「親子 de 楽しむ救急法」と「親子 de 学ぶ防災」を開催しました。このイベントは、全国で展開する「赤十字講習100周年記念キャラバン」の一環で、開会のセレモニーでは、日赤鳥取県支部職員の救急法指導員から、講習機材(訓練用のAEDや人形)や全国から寄せられたメッセージなどが“バトン”代わりに手渡されました。その後、両支部の救急法指導員が連携し、心肺蘇生やAEDの操作方法、傷病者の搬送などを指導。午後からの防災講座では、「ドローイングチャレンジ」「おうちの中のケケン」「非常持ち出し品を考えよう」の3本立てで、大雨や地震などの災害について学び、命を守る行動や家族でできる備えを親子で楽しみながら体験・学習しました。



新・防災セミナー 「大雨・台風の避難スイッチ」 JRC指導者が研修に参加



日赤静岡県支部では、7月2日、青少年赤十字加盟校の指導者や青少年赤十字賛助奉仕団員を対象にした研修を実施しました。今年度に誕生した、新しい赤十字防災セミナー「大雨・台風の避難スイッチ」を活用した研修会には、12人が参加。奇しくも、同日に下田市でレベル4の土砂災害危険警報が発令されたこともあり、参加者は皆、大雨や台風による風水害をいつも以上に「自分ごと」として捉え、セミナーに取り組みました。

風水害発生時の状況を想定したワークでは、避難の判断や行動のタイミングについて考えるとともに、日ごろからハザードマップや避難場所を把握しておくことの重要性を再確認。

参加した指導者たちは、学校現場での防災教育への活用を見据えながら理解を深め、児童・生徒たちの主体的な避難行動につながる指導について、学びを深めました。



応募者100人超！ 献血ルームで 祇園祭観覧イベント



京都府の「献血ルーム四条」では、日本三大祭りの1つである祇園祭の前祭・後祭に合わせて、山鉾巡行をゆったりと見学できる『祇園祭観覧席』を設置。この観覧席には献血アプリ「ラブラッド」から100人を超える応募があり、当選された方々は、献血ルームのある5階から見下ろす特等席で祇園祭を観覧しました。盆地特有の蒸し暑さが続く7月の京都で、冷房の効いた部屋から、窓の直下を移動する山鉾を見られるだけでなく、巡行順を確認する伝統儀式「くじ改め」の様子も間近で見ることができると、見どころたっぷり。献血とともに、歴史と伝統を感じさせる京都の夏の風物詩を満喫した参加者からは、たくさんの笑顔が見られました。

★公式Instagramでイベント動画・写真がご覧いただけます。

インスタもCheck!

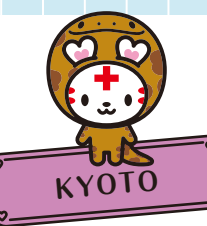


「これはどの県？」 ご当地ハートラちゃん で学ぶ各県の特徴



佐賀市立諸富北小学校では、6年生の総合学習の時間で、ご当地ハートラちゃんを活用して各県の特徴を学ぶ授業が行われました。この授業では、西日本のご当地ハートラちゃん24体のイラストが描かれたプリントが配られ、児童たちはタブレットや地図帳を使いながら各ご当地ハートラちゃんに対応する県名を推理。県によっては難易度が高いものもありましたが、周囲の児童と話し合いながら考え、最後の答え合わせでは多くの児童が満点を取り、嬉しそうにガッツポーズをとる児童も。授業後には「それぞれの県に意外な名物があることを知ることができてよかった」などの感想が聞かれました。児童が主体となって学びあい、お互いに協力しながら理解を深める協働的な授業となりました。

Area News



水の事故から命を守ろう！ 親子、学生向けの 水上安全法講習が各地で



日赤福岡県支部では、6月2日・9日、福岡市内の中学校教員を対象に、着衣泳体験指導講習を開催。2日間で約70人が参加しました。当日はテレビ5社の取材が入り、注目度も高かったこの講習。着衣状態で落水した場合の対応や、ペットボトルやランドセルなど、身近なものを使った救助法を学び、参加した教員からは「体感したことをしっかり伝えたい」といった声が聞かれました。(①)

京都府支部では、京都踏水会水泳学園にて「泳がない水上安全法講習会」を開催し、親子連れ10人が参加。「溺れない講習」に重点を置き、「浮いて待て」「サンダルバイバイ」を教訓に、水に落ちたら無理に泳がず浮いて助けを待つこと、川や海でサンダルが流されても絶対に追いかけないことを学びました。「物はまた買える、命は1つ。失くしても怒らない、と事前に子に伝えて」と保護者に理解を促しました。(②)

神奈川県支部では、7月20日に三浦海岸海水浴場で「赤十字de自由研究“いのち”を守る体験教室」を開催しました。親子連れ88人が参加し、浮き身やライフジャケットのレクチャー、着衣泳、レスキューボード体験などを行いました。最初は浮き身の姿勢

に怖がる様子の子どもたちもいたものの、指導員のていねいなレクチャーに次第に表情が緩み、最後は笑顔でイベントを終えました。(③)

香川県支部では、7月25日に観音寺市花稲海岸で開催された「ファミリーマリンスクール」に参加。赤十字安全奉仕団と共にレスキューボードの体験ブースを展開しました。参加者25人は、水上安全法指導員のサポートでレスキューボードの操作を体験。水難救助で使用するレスキューチューブを使った水難救助も一部体験しました。参加者からは、「海の楽しさだけでなく、命を守る大切さを学ぶことができた」と感想が寄せられました。(④)

静岡県支部では、県内20校、約1400人の児童・生徒を対象に「着衣泳講習」「水に入らないレスキュー」を実施しました。衣服を着たまま水に落ちた場合の浮き身の取り方やライフジャケットの正しい着用方法、水に入らない救助法などを学習。児童・生徒たちからは、「水の事故が起こりそうな場所や場面を知ることができた」などの感想があり、水の事故から身を守る方法について理解を深めました。(⑤)

PRESENT!!

もうすぐ「日赤150周年」記念企画

「日赤150周年クイズ」9月24日公開!

Quiz

Q. 1890年の9月に、日本の和歌山県沖で遭難し、日本赤十字社が負傷者の治療・看護を行ったトルコの軍艦は何でしょう?

ア. タイタニック号
イ. エルトゥールル号
ウ. ノルマントン号

日赤は、2027年5月1日に創立150周年を迎えます。これを記念して、150年の歩みや赤十字の活動を楽しく伝える「日赤150周年クイズ」を特設サイトで実施。今回は、その中からひと足早く出題! 「日赤150周年クイズ」は9月24日公開予定。こちらどうぞお楽しみに!

クイズのヒントはこちら!▶▶▶

プレゼント

ドクターエア フィットウェーブ MN-06

やさしい電気の刺激で、首・肩の筋肉のコリをほぐす

長時間のスマホやパソコンで気づけば首がガチガチ…。そんな悩みのケアに取り入れたい、ネックレス感覚で使える低周波治療器。電気刺激が首や肩まわりの筋肉のこりをほぐし、約42℃のヒーターで首もとをじんわり温めます。5種類の低周波モードと10段階の強弱調節で、好みの刺激を選択可能。わずか約90g、充電式コードレスだから、家事や仕事の合間にも気軽に使えます。

7名様に当たる!

本体サイズ: 約幅10×高さ3.4×奥行3.2cm(ベルト含まず)、質量: 約90g。
管理医療機器 医療機器認証番号: 305AHBZX00027000

国内災害義援金 受け付け中

熊本地震災害、滋賀県甲賀市の土砂崩れ災害などで、被災された方々を支援する義援金を受け付け中です。詳しくはこちら▶▶▶



赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!



プレゼントは右の二次元コードから応募ください。応募締め切り: 2026年9月30日(水) ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから▶



バングラデシュ南部避難民を支える赤十字の支援

世界の「いま」WORLD NEWS

危険な航路と知っても、希望を求めて海へ



インドネシア・アチエ沖の海上を漂流していた難民をインドネシア海軍が保護(2021年12月)

何が起こったの？

*UNHCR=国連難民高等弁務官事務所

- ✓ 2017年8月、ミャンマー・ラカイン州で少数民族への激しい暴力行為が発生
- ➡ 70万人以上が隣国バングラデシュへ一斉に避難
- ✓ 避難民キャンプの人口は増え続け、現在では120万人超に
(2026年6月UNHCR*統計)
- ✓ キャンプは人口過密、将来の希望も見えない中、災害も発生
- ➡ 避難民が危険な海の移動を試み、昨年は約900人死亡 (UNHCR発表)

現地の課題

- 就業が制限され、子どもたちは教育も受けられない
- ➡ 加えて、国際的な支援が減少、4月から食糧支援も削減
- 衛生環境が悪く、脆弱な生活環境
- ➡ 毎年、自然災害が発生、人道危機がさらに深刻化
- 避難民の8割が女性と子ども
- ➡ 教育や保健、「こころのケア(心理社会的支援)」が急務

赤十字の支援は…？

- ・ 避難民キャンプへの支援(保健、水・衛生、住居、生計、防災)
- ・ 避難民の自立を支え、地域の「守り手」を育てる
- ・ 自然災害のためのレジリエンスの強化

日赤の支援

- ・ 診療活動
- ・ 母子保健活動
- ・ 地域保健活動
- ・ 「こころのケア」



写真で見る

避難民キャンプの変遷



2017年のコックスバザール。ミャンマー・ラカイン州から避難してきた人々が暮らすキャンプの様子



2019年には、通称「ジャパンクリニック」と呼ばれる日赤が運営を支援する診療所が完成



6年目を迎えたキャンプの様子。大きな道は整地され、通りには露店や食堂が並び

赤十字の取り組み

9年経っても先の見えぬ難民危機と、追い打ちをかける自然災害…

バングラデシュ・コックスバザールにある世界最大級の避難民キャンプ。2017年の大規模な避難民流入から9年近くが経った今も、約120万人もの避難民が暮らしています。しかしキャンプでの厳しい生活を背景に、マレーシアやインドネシアなどを目指して危険な海路に出る人々が後を絶ちません。避難民を乗せた船が海で転覆し、2025年は約900人が犠牲になり、今年7月には500人以上が死亡した恐れがあるとされています。

バングラデシュ赤新月社(BDRCS)は、IFRC*²や各国赤十字社、赤新月社と連携し、避難民キャンプで、給水・衛生、住居、生計支援の他、災害リスク削減のための支援を行っています。日赤もまた、診療活動に加え、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりや妊産婦のための健康支援、「こころのケア」、ボランティアによる保健活動など、地域に根差した取り組みのサポートを行っています。

長期化する避難生活に加え、人々の生活を脅かすのが、モンスーン豪雨による自然災害。今年7月上旬にも、バングラデシュ南東部および北東部を中心に記録的な豪雨が発生し、洪水や土砂崩れによって50人以上が死亡。26万以上の世帯が孤立し、110万人以上が被災しました。そのため、3500人以上のボランティアが救助や避難支援を行い、食料や安全な水の供給、医療サービスの提供を行っています。日赤も、BDRCSと連携しながら、現地のニーズに応じた支援を引き続き行っています。



避難民キャンプで水害が発生。避難民誘導や、世帯訪問を行うボランティア



土砂崩れで寸断された道路の復旧作業にあたるボランティア



降り続く大雨により河川が氾濫し、広範囲で洪水被害が発生

*2 IFRC=国際赤十字・赤新月社連盟

海外救援金、受け付け中

「バングラデシュ南部避難民救援金」ほか、ベネズエラ地震など、現在募集中の海外救援金についてはコチラから」

